

貝原益軒『大和本草』

古賀, 京子
九州大学医学図書館相互利用係

<https://doi.org/10.15017/6796174>

出版情報 : 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2022/2023, pp.29-31, 2023-09-01. Kyushu University Library

バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International

貝原益軒『大和本草』

古賀 京子[†]

【キーワード】 大和本草、貝原益軒、久野家、李時珍、本草綱目、葛根、木乃伊、竹田文庫、竹田春庵

Ekiken Kaibara “Yamato Honzou”

KOGA Kyoko

1. 貝原益軒『大和本草』

現在、牧野富太郎の再評価にともない江戸時代の本草学が改めて注目されている。日本で初めて日本人のために著述・出版された本草書が『大和本草』である。『大和本草』は、宝永6年（1709）貝原益軒¹が79歳のときに完成、翌年に刊行されている。1607年に中国から李時珍の『本草綱目』が舶載され、日本の本草学に多大な影響を与えた。益軒は『本草綱目』に収載された動植物や鉱物等が日本における何にあたるのかを鑑定し、その名称や使用法等について日本のものに合わせ、日本独自の本草書を作ろうとした。あくまでも「民生日用」すなわち武士のみならず一般庶民が日常的に活用できる、日本人のための本草書である。『大和本草』では、『本草綱目』の約1900種の収載品のなかから、日本に産しないものおよび薬効的に疑わしいものを除いて772種をとり、さらに他書からの引用（外）、日本特産品（和品）および西洋からの渡来品（蛮種）などを加え、1362種の薬物を収載した。全体としては博物学的な傾向にある。中国での漢名の和訳、また、日本国内でも地域ご



図1 医学図書館所蔵『大和本草』

泌尿器科教室が昭和14年（1939）に大久保松次郎から購入したものである。蔵書印「久野家蔵」は、廣瀬文庫本（福岡図書館旧蔵）に多数見られることから福岡藩家老の久野家のものと思われる。久野家の蔵書は散逸しており、山口県岩国城に展示されている『吉川家記』にも同じ蔵書印が見られる。

[†] こが きょうこ 九州大学医学図書館相互利用係
 (〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1) E-mail: koga.kyoko.676@m.kyushu-u.ac.jp

1 貝原益軒（1630-1714）は、福岡藩の儒学者、博物学者、庶民教育家。名は篤信、字は子誠、通称は久兵衛。久しく損軒と号し、晩年に益軒と改める。『養生訓』『女大学』など多くの著作がある。本草学に造詣が深く、『本草綱目』の和刻本発行に携わり、『大和本草』以外にも『花譜』、『菜譜』などの本草書を著した。中央図書館所蔵の竹田文庫には益軒の高弟である竹田春庵宛の益軒の書簡類が収められている。

との方言による呼び名が違うなど、同名異物・異名同物を識別することは非常に骨の折れる作業であり、ことのほか注意を払ったようである。

2. 『大和本草』に見える「葛根」と「木乃伊」

いくつか『大和本草』に記載された記述を紹介する。一つは葛根（クズ）（巻之6薬類）である。現在でも葛根湯は風邪薬としてよく知られ一般的に用いられている。蔦を縄としたり、皮を布として帷子にしたりするなど食用以外の用途は和漢同じとある。根を突き砕いて汁をとり、水を飛ばしてさらして粉としたものが葛粉であり、薬にしたりモチにしたりする。下痢を止め酒毒熱毒を消すなど効能は多く、また飢餓を助けるものとして「民用ニ利アリ」とする。吉野産のものが最良とされた。また『本草綱目』には、野生の葛には毒があるとするが、日本では園庭で植えたりせず野生の葛しか使わないが、毒があるなど聞いたことが無い。毒のある野葛というのは別物なのだろう、とある。

もう一つは木乃伊（ミイラ）（巻之16人類）である。当時、ミイラの作り方や産地はわかっていなかったようで、紅毛（オランダ）の隣国のものであり「罪人ヲトラヘテ薬ニテムシ焼」という説を信じていたようだ。ミイラは打撲・傷・胸痛・歯痛・食傷・難産などに効くとして様々な使用法が挙げられている。例えば「頭痛積聚眩暈ニ湯ニテ服ス」とある。しかしミイラは人肉であり、人が人を食うことは仁厚のことではない。たとえ効能があったとしても君子には耐えられないことだとある。また処方も全てを信じることはできないと疑問を持っている。

3. 『大和本草』編集メモ？

竹田文庫に収められた益軒書付に、鳥類の名称を書き連ねたものがある。名称の後にはそれぞれ短い記述がある。「～乎（か）」「～や」など、疑問形で終わっているものが多く、同物異物を識別する前の考察メモのようである。

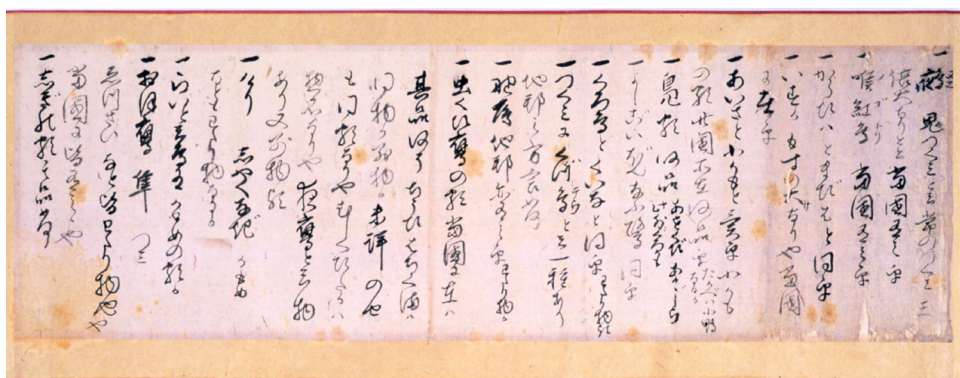


図2 益軒書付 中央図書館竹田文庫所蔵（益軒書簡 /108巻 /533）

- 一鶴（ヌエ） 鬼つくミと云 常のつくミ三倍大なりと云 當国有之乎
- 一喉紅鳥（ノゴドリ） 當国有之乎
- 一からひハとまびはと同乎
- 一いすか もすの大サなりや 當国に在乎
- 一あいさと小かもと異乎 小かもの類此国所在何品乎 たかべハ小鴨なるか
- 一鳧類 何品あをくびあかがしら此外ニくろかも
- 一よしごいがん なふ鷺 同乎
- 一くろ鳥とくいなと同乎 わたり物歟
- 一つくミにくはつ鳥と云一種あり 他邦之方言如何
- 一野鷹 他邦亦有之乎 わたり物か
- 一虫くひ鷹の類 當国に在ハ其品何そ ちうひはちくまは同物か別物か未詳のせも同類なりや むしくひたかハ惣名なりや 夜鷹と云物あり又別物歟
- 一けり しやくなぎ かもめなどもわたり物なるか

一らいと云鳥有 かもめの類か
一お保鷹 隼 つミ えつさいなと皆わたり物也や 當国に皆有之候や
一しぎの類 其品如何

『大和本草』巻之15には水鳥、山鳥、小鳥、家禽、雑禽、異邦禽合わせて100種の鳥が収載されている。書付にある鳥もすべて収載されており、記述内容にも関連が見られる。当時のベストセラーであった『大和本草』が作られるまでには、益軒の試行錯誤や地道な調査があったことがうかがえる。

参考文献

- [1] 益軒資料五 書翰集（下）（1989）九州史料叢書 九州史料刊行会.
- [2] 白井光太郎（1932-1936）『考註大和本草』春陽堂.
- [3] 杉本つとむ（2011）『日本本草学の世界——自然・医薬・民俗語彙の探求』八坂書房.
- [4] 『日本大百科全書』（1984-1994）小学館.



本著作の著作権は著者に帰属します。注があるものを除いて、本著作の内容物はクリエイティブ・コモンズ表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンスの下に提供されています。
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja>